



循環型社会への変革を待望する

Revolution for a Sustainable Circulating Society

高野 清 南*

Kiyonami Takano

アウトドアスポーツの季節には、周辺の野山をウォーキングで楽しむ人が多くなった。各地に自然遊歩道があり、首都6県には全144コースの「関東ふれあいの道」がある。コース長は平均10数kmと丁度1日のウォーキングが楽しめる。一部には、観光客でにぎあう名所やハイキングコースも含まれることもあるが、多くは自然を楽しめるコースが選ばれている。天気の良い日に、四季で変化する遊歩道を歩くのは気持ちよく楽しい。いろいろの草花の見聞や野鳥の観察ができる。また、周辺の集落では人々の生活の営みが垣間見えてこれも楽しい。しかし、残念なことは、不法投棄されてきたゴミ捨て場や廃棄自動車、建設廃材の山をコースの所々に見ることである。

ここどころテレビや新聞で、ゴミの焼却によるダイオキシンの放出や産業廃棄物処理場の問題、家電製品のリサイクルなどの特集が頻繁に繰り返される。二酸化炭素放出の削減の問題と合わせて、廃棄物とリサイクル問題は一種のブームとなっている。

物質の豊かさや経済成長を追求してきた現代社会が、大量生産、大量消費で、大量廃棄物と環境破壊をもたらしていること、また、このような社会は、資源とエネルギーの枯渇により、持続できなくなること、持続可能な社会とするためには、物を大事にして、資源やエネルギーを有効に使わなければならないことなど、誰しも理解できる。また、そのためには、生産と流通から、消費と廃棄までの全段階で、資源とエネルギーを有効に使い、不要となった物を再生・再利用して、最終処分量を最小にする必要がある。資源と物質を循環し、廃棄を最小にする経済システムへの変化が必要であることも、少し考えると理解できる。しかし、それを如何にしたら実現できるかについては、実際のところよく分からない。

ライフスタイルや価値観の変革が必要だと言われる

が、実生活での実行はなかなか困難である。また、テレビなどで、先駆的に試行されているリサイクルシステムや研究開発が紹介されると、あたかも、そのシステムを使えば問題が解決されるような錯覚を持つ。

1991年に「再生資源の利用の促進に関する法律」が制定され、各種産業で積極的なリサイクルへの取り組みが行われ、国や公共団体のプロジェクトも幾つか行われている様だ。「リサイクル工学」(鈴木胖編, エネルギー・資源学会, 1996年8月発行)を勉強させてもらった。廃棄物処理はもちろんのこと、建設を含め、各種の素材や製品について既に多くのリサイクルが行われている。種々の新しい試みも行われ、技術開発も相当進んでいる。しかし、全体的に見ると、リサイクルは限られたケースしか実現されていない。その理由は、ほとんどの場合再生資源は処女資源より質が劣り、コストが高いことによる。多くの人々は、環境に優しいと言われても、悪い物を高く買うことに不合理を感じる。技術開発が進んだとしても、これまでの市場経済ではリサイクルの進展に多くは期待できない。

リサイクルする方がより経済的になるような社会的なインセンティブを与える必要を痛感する。これまでの廃棄物の管理責任を行政が負うシステムは、環境コストのツケを税金に回すだけで、社会システム全体として返って不経済となる。生産者の責任を製造から廃棄までの全ライフサイクルに拡大することで、トータルとして最適化の方がよい。もちろん、全ライフサイクルの環境コストは製品価格に上積みされ、消費者が負担することになる。課徴金やデポジットなどは、消費者に直接環境コストの負担を告げ、リサイクルへの意識改革にも貢献する。

廃棄物とリサイクルの問題をブームだけに終わらせたくない。消費者市民の自由で合理的な選択が、リサイクルの推進を加速する社会システムへの変革が望まれる。

*工業技術院 電子技術総合研究所 エネルギー部主任研究官

〒305-8568 茨城県つくば市梅園1-1-4